

令和 6 年度日本語指導研究推進事業
実践報告資料集

兵庫県教育委員会

目次

1 芦屋市立潮見小学校	・ ・ ・ 1
2 加西市立北条小学校	・ ・ ・ 9
3 姫路市立花田小学校	・ ・ ・ 20

令和 6 年度 日本語指導研究推進事業 実践報告資料

[学校名：芦屋市立 潮見小学校]

【具体的な研究テーマ】 思いや考えを聴き合い、学び合う子どもの育成 ～一人ひとりの学びに寄り添った日本語指導をめざして～	
1 教科：単元名 国語科：じどう車くらべ・じどう車ずかんをつくろう（光村図書）	
2 実施日（時期） 令和 6 年 1 1 月 1 1 日（月）	3 実施場所 こくさいルーム
4 児童・生徒の実態に応じたねらい (1) 児童の様子・・・学年・国籍、学習状況、日本語習得状況など A 児・・・学年：1 年生 国籍：中国 母語：中国語 滞日期間：1 ケ月 D L A（11 月実施）：語彙力 38%（母語 49%）（英語 34%） 学習状況：10 月に中国から編入したばかりで、サバイバル日本語と日本語基礎を学習している。簡単なあいさつや身の回りの言葉、ひらがな 50 音の読み書きは理解できている。 B 児・・・学年：1 年生 国籍：フィリピン 母語：英語 日本生まれ D L A（4 月実施）：語彙力 63%（母語 78%） 話す 2 読む 1 書く 1 聴く 2 学習状況：日常会話は簡単な日本語で話すことができる。 理解や思考がゆっくりであるため、学習の定着には長い時間を必要とする。ひらがなの読み書きの理解も十分ではない。 (2) 日本語指導に関する目標 ・事柄の順序など、情報と情報との関係を理解することができる。（知識・技能） ・事柄の順序に沿って簡単な構成を考え、説明する文章を書くことができる。（思考・判断・表現） ・さまざまなじどう車に関心を持ち、説明の順序に気をつけながら読んだり、それを生かして「じどう車ずかん」を書いたりすることができる。（学びに向かう力） (3) 主な学習活動 ①母語で大まかな単元の流れや、教材文の内容の大体を捉える。 ②言葉とイラストの教材を活用しながら教材文を読み、じどう車の「しごと」と「つくり」の関係を確かめる。 ③教材文以外のじどう車について、「しごと」と「つくり」を説明する練習をする。 ④紹介したいじどう車について調べ、調べた内容を文章に書く。	
5 評価の観点（※指導案に記載してある場合は不要） ・じどう車には、「しごと」と「つくり」があることを理解している。 ・表現モデルを使って、じどう車の「しごと」と「つくり」を説明している。	
6 指導内容の概要（※指導案別途添付） 導入の段階では、来日して間もない児童に対して、子ども多文化共生サポーターと連携した母語による理解支援を行った。単元の大まかな流れを母語で説明することで、教材文の説明の仕方を利用して自分の調べたことを説明する文章を書くという見通しがもてるようにした。また、母語による読み聞かせを行い、教材文の内容の大体を捉えられるように	

した。

教材文を詳しく読む段階では、教材文の言葉をイラストと共に提示し、日本語の言葉のイメージを膨らませることで、教材文を読んで理解する手助けとなるようにした。言葉とイラストの教材は在籍学級の担任と共有し、在籍学級の授業でも活用してもらうことで、語彙習得を促すと共に、外国籍以外の児童の理解支援にもつながるようにした。

教材文で学習した文章構成を活用して「じどう車ずかん」を書く段階では、事前に言葉とイラストのカードを、じどう車の「しごと」と「つくり」で組み合わせる活動を行った。情報と情報との関係を理解できるようにし、表現モデルに当てはめ、説明するための思考の手助けとなるようにした。

7 指導内容・方法において工夫したところ

- ・「聞く」「話す」「読む」「書く」のバランスを意識して学習活動を行った。
- ・教材文に出てくる言葉をイラストと共に提示する教材を作成した。
- ・教材文を読み進める中で、児童からのつぶやきや対話を大切にし、経験を尋ねたり気づきを共有したりした。
- ・絵カードを組み合わせる活動を通して、情報と情報との関係を理解できるようにし、表現モデルに当てはめて説明するための思考の手助けとなるようにした。
- ・「しごと」や「つくり」を正しく組み合わせられないときには、写真や動画を見て確認できるようにした。
- ・単元の最後にある書く活動を見通し、習得させたい文型を取り出し指導で繰り返し練習した。
- ・作成した教材を在籍学級の担任と共有したり、児童のノートに貼ったりし、いつでも授業中に確認できるようにした。

8 教材・教具

- ・ルビつき教科書（光村図書 1年下）
- ・言葉とイラストの教材（PowerPoint・プリント・カード）
- ・ワークシート

9 活動の様子（写真等）や児童・生徒の感想等

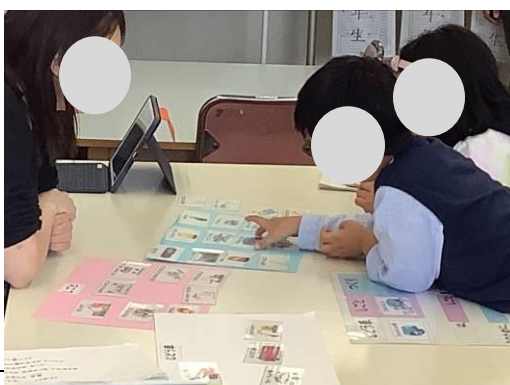
【板書】



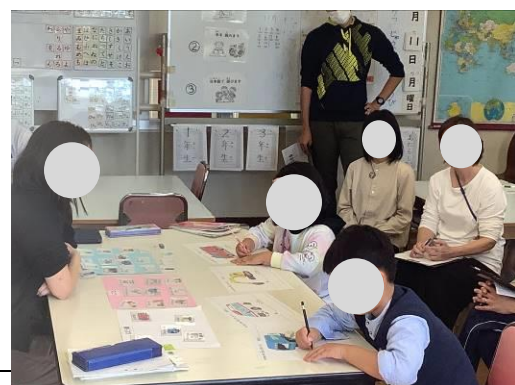
【言葉とイラストを見ながら読み聞かせ】



【しごととつくりを 絵カードで組み合わせ】



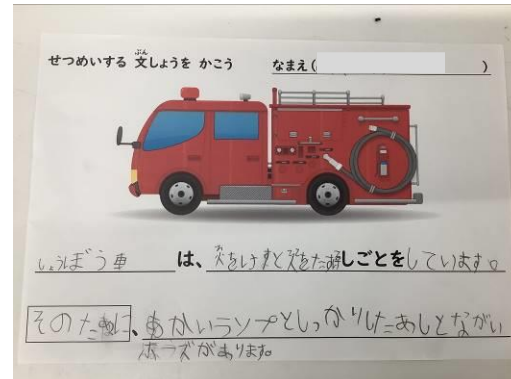
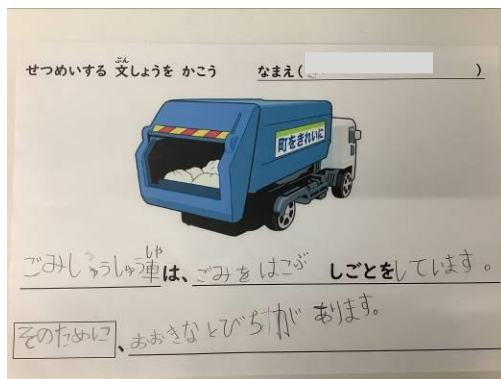
【表現モデルを使って 文章を書く】



【絵カードの教材】



【ワークシート】



A児：ごみしゅうしゅう車は、ごみをはこびしごとをしています。
そのために、おおきなとびらがあります。

B児：しょうぼう車は、火をけすと人をたすけるしごとをしています。
そのために、あかいランプと、しっかりしたあしと、ながいホースがあります。

10 日本語能力測定方法と評価(DLAの活用)

DLAは、日本語指導が必要な児童全員を対象に実施した。測定を日本語指導研究推進教員が行い、記録を日本語支援員が行った。

測定は全領域ではなく、「導入会話」「語彙力チェック」「話す」「読む」に限定した。

評価については、校内の日本語指導研究推進委員会や職員会議で共有し、日本語指導が必要な児童の実態把握の一つとして活用し、児童の支援や指導に役立てている。

DLAや日本語習得度確認シートで得られた評価をもとに、日本語支援段階一覧表を作成し、情報共有をしている。また、日本語支援段階一覧表と照らし合わせて確認することのできる「指導のヒント」を、参考資料として共有している。「指導のヒント」は、文部科学省の『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント(DLA)』が提示しているものを、本校の書式に合わせてまとめた。

11 実践をととしての成果

- ・はじめの音読(「読む」)では、言葉とイラストの教材により、語彙の少ないA児も逐次読みの段階のB児も、言葉の意味を理解しながら読み進めることができた。理解支援として、児童が内容を理解したり、友だちと対話したり、生き生きと授業に参加したりす

るための、効果的な手立てとなった。

- ・じどう車の「しごと」と「つくり」を考える段階では、それぞれが興味をもって絵カードを組み合わせ、説明しようとする姿が見られた。当てはめて終わりではなく、対話（「話す」「聞く」）によって考えを引き出したり、表現したりできるように働きかけたことで、B児が自分の考えを自分なりの言葉で表現できていた。
- ・最後のワークシート（「書く」）の活動では、絵カードで十分に情報の関係性や文章構成を理解できており、集中して取り組むことができた。ワークシートの形式を、自由に表現できる幅をもたせて作成したことで、カードを使いながら自分の考えを自分なりに表現しようとする姿が見られた。
- ・教材を取り出し指導での活用に留めることなく、在籍学級の担任と共有し、授業で活用してもらうことにより、取り出し指導と在籍学級での学習に確かなつながりを生み出すことができた。言葉とイラストを手元のノートでいつでも確認できるようにすることで、安心感や自信をもって学習に臨む児童の姿が見られた。
- ・今回の研究授業を、校内の教員や市内の教員、日本語指導のボランティアの方など、多くの方に参観していただくことで、日本語指導の実践を広めることができた。日本語指導で大切にしていることや、指導の工夫などについて共有することで、それぞれの立場で取り組める支援について考える機会とすることができた。

12 今後の課題

- ・日本語指導の実践を多くの方に見ていただくことで、日本語指導が必要な児童にとっての支援のあり方を確認することができた。すべての学級において、日本語指導が必要な児童を意識した誰もが分かりやすい授業づくりが行われるように、情報発信や研修を重ねていく必要がある。
- ・外国につながる児童や、日本語指導が必要な児童が増え続けており、教職員は十分なサポートができないことへの不安が大きい。日本語指導研究推進教員の配置がなくなった後にも外国につながる児童らを支援していけるよう、これまでの取り組みを持続可能な体制として整備し、引き継ぐ必要がある。

第1学年 国語科（日本語指導）学習指導案

指導者 内藤 早央里

場所 こくさいルーム

1 日時 2024年11月11日（月）5校時

2 単元名 じどう車くらべ・じどう車ずかんをつくろう（光村図書）

3 単元の目標

- ・事柄の順序など、情報と情報との関係を理解することができる。（知識・技能）
- ・事柄の順序に沿って簡単な構成を考え、説明する文章を書くことができる。（思考・判断・表現）
- ・さまざまなじどう車に関心をもち、説明の順序に気をつけながら読んだり、それを生かして「じどう車ずかん」を書いたりすることができる。（学びに向かう力）

4 指導にあたって

(1)児童観

対象児童は2名である。

Aは、10月に中国から編入したばかりの滞日年数が1ヶ月の児童である。中国は9月入学のため、学校生活自体が初めてで、学校での生活の仕方や友だちとの関わり方など、生活における支援も必要である。自分ができないことや、やりたくないことに対しては強い拒否反応を示すことがある。来日前に家族で日本語を少し勉強しており、簡単なあいさつや、身の回りの言葉、ひらがな50音の読み書きは理解している。記憶力や思考力、計算力などの認知力が高く、覚えたことをどんどん活用しようとしている。子ども多文化共生サポーターによる母語支援や、日本語指導教員による取り出し指導、「こくさいルーム」での初期日本語指導、日本語教室、教科学習の支援を受けながら日々学んでいる。

Bは、日本生まれのフィリピン国籍の児童である。日常会話は簡単な日本語で話することができる。学習に対して真面目に取り組むことができるが、理解や思考がゆっくりであるため、学習の定着には長い時間を必要とする。在籍学級の授業では、全体の指示を十分に理解できなかったり、発話も一言二言に留まっていたりする様子である。日本語指導教員による取り出し指導、放課後の「こくさいルーム」での初期日本語指導、日本語教室、教科学習の支援を受けながら学んでいる。

	母語 滞日年数	D L Aの結果と 児童の実態
1-3 A	中国語 1ヶ月	【11月D L A 語彙力 38%（中国語 49%）（英語 34%）】 家庭内言語は中国語。イギリスで生まれ、3歳までイギリスで育ち、英語で生活していたとのことで、本人は英語の方が得意だと話している。しかし、中国語・英語共に十分な語彙は身につけていない。日本語の語彙もまだ少ないが、記憶力がよく、どんどん日本語を覚えている。ひらがな50音の読み書きは習得しており、短い文章をゆっくりと読むことができる。

1-3 B	英語 6年10ヶ月 日本生まれ	【4月DLA 語彙力 63%（母語 78%） 話す2 読む1 書く1 聴く1】 家庭内言語は英語。語彙は英語の方がスムーズに出てくる様子である。日常でよく耳にする日本語の語彙は習得しているが、「まつげ」「爪」「つの」「枝」「ひげ」「引き出し」「運転手」などの低頻度の語彙は身についていない。「短い・長い」「細い・太い」「軽い・重い」などの、状態を表す形容詞の理解も十分ではない。ひらがな 50 音の読み書きは習得しているが、「読む」ことに関しては、音読が逐次読み（文字を一字ずつ読む）の段階であり、言葉の意味や文脈の理解に時間がかかる。
----------	-----------------------	--

(2)教材観

本教材「じどう車くらべ」は、「問い＋答え＋答え＋答え」という列挙型の構成になっている説明文である。「どんな『しごと』をするのか」、そのために「どんな『つくり』になっているのか」という二つの問いがあるため、二つの段落に分けて書かれている明確な構成である。写真や絵を手がかりに、「しごと」と「つくり」を考えて、説明の文章を書くことができるようにしたい。

(3)指導観

日本語の初期支援段階の児童であるため、母語を使った理解支援や、日本語の言葉のイメージを膨らませる理解支援、絵カードを使った思考の整理の支援、文型のモデルを示す表現支援を行い、在籍学級での学習に主体的に参加できるようにしたい。

導入の段階では、Aに対しては子ども多文化共生サポーターと連携した母語による理解支援を行う。単元の大まかな流れを母語で説明することで、教材文の説明の仕方を活用して自分の調べたことを説明する文章を書くという見通しがもてるようにしたい。また、母語による読み聞かせを行い、教材文の内容の大体を捉えられるようにする。

教材文を詳しく読む段階では、教材文の言葉をイラストと共に提示し、日本語の言葉のイメージを膨らませることで、教材文を読んで理解する手助けとなるようにしたい。言葉とイラストの教材は在籍学級の担任と共有し、在籍学級の授業でも活用してもらうことで、語彙習得を促すと共に、外国籍以外の児童の理解支援にもつなげたい。

教材文で学習した文章構成を活用して「じどう車ずかん」を書く段階では、事前に言葉とイラストのカードを、じどう車の「しごと」と「つくり」で組み合わせる活動を行う。情報と情報との関係を理解できるようにし、表現モデルに当てはめて説明するための思考の手助けとなるようにしたい。明確化する表現モデルは、教材文やAU（Activity Unit）カードを参照し、児童にとって分かりやすいものになるようにする。

5 単元計画 (全12時間)

時	指導形態	学習活動	教師の支援
1	取り出し (母語)	・母語で、単元の大まかな流れを確認し、内容の大体を捉える。	・子ども多文化共生サポーターと連携し、母語による理解支援を行う。 ・ルビつきの教材文を準備し、自分で読み進められるようにする。
2	在籍学級	・学習課題を設定し、学習計画を立てる。	・使用するワークシートを提示し、活動の見通しをもてるようにする。
3	取り出し	・問いの文や、出てきたじどう車など、文章全体の話題を確かめる。	・教材文の言葉をイラストと共に提示し、日本語の言葉のイメージを膨らませる理解支援を行う。
4 5 6	在籍学級 (バス・乗用車) (トラック) (クレーン車)	・それぞれのじどう車の「しごと」と「つくり」を読み取り、ワークシートに整理する。	・取り出し指導での学習を想起させたり、友だちとの関わりをつないだりし、主体的に参加できるようにする。
7	取り出し (バス・乗用車) (トラック) (クレーン車)	・「しごと」「つくり」に分けられた絵カードを組み合わせ、じどう車の「しごと」と「つくり」の関係を確かめる。	・絵カードを組み合わせる活動を通して、情報と情報との関係を理解できるようにする。
8	取り出し 【本時】 (はしご車) (ごみ収集車) (救急車)	・教材文以外のじどう車について、「しごと」と「つくり」を説明する練習をする。	・絵カードを組み合わせる活動を通して、情報と情報との関係を理解するとともに、表現モデルを使って説明できるようにする。
9	在籍学級 入りこみ (母語)	・本や図鑑、インターネットを使って、紹介したいじどう車について調べる。	・子ども多文化共生サポーターと本を読み、「じどう車ずかん」に書きたいことを決められるようにする。 ・母国のじどう車も選択肢として認め、その児童ならではの気づきを紹介できるようにする。
10	在籍学級 入りこみ	・調べた内容を文章に書く。	・児童にとって分かりやすい表現モデルのワークシートを活用し、調べたことを自分の日本語の力で表現できるようにする。
11	在籍学級 (母語)	・友だちと文章を読み合い、感想を伝え合う。	
12	在籍学級 (母語)	・単元の学習を振り返る。	

6 本時の目標

(教科の目標)

- ・じどう車には、「しごと」と「つくり」があることを理解し、説明することができる。

(日本語の目標)

- ・「〇〇〇は、～のしごとをしています。」「そのために、～があります。」の表現モデルを使って、じどう車の「しごと」と「つくり」を説明することができる。

7 本時の展開

学習活動	指導上の留意点	評価規準
1 言葉のイラストを見ながら、教材文の読み聞かせを聞き、これまでの学習を思い出す。	・ ゆっくりと読み聞かせを行い、言葉のイメージを膨らませながら、教材文を聞けるようにする。	
2 教材文以外のじどう車の「しごと」と「つくり」を考える。	・ 提示したじどう車を知っているか、見たことがあるかなど、経験を尋ねたり対話したりすることで、じどう車に興味をもてるようにする。	
3 絵カードを組み合わせ、じどう車の「しごと」と「つくり」を表現モデルに当てはめながら説明する。		
「〇〇〇は、～しごとをしています。」 (AU カード：C-3 動きを観察する) 「そのために、～があります。」 (AU カード：C-5 特徴を見つける)		
・ はしご車は、人を助ける仕事をしています。そのために、長いはしごがあります。 ・ ごみ収集車は、ごみを集める仕事をしています。そのために、大きなとびらがあります。 ・ 救急車は、病気の人を運ぶ仕事をしています。そのために、赤いランプがあります。	・ 絵カードを組み合わせる活動を通して、情報と情報との関係を理解できるようにし、表現モデルに当てはめて説明するための思考の手助けとなるようにする。 ・ 「しごと」や「つくり」を正しく組み合わせられないときには、動画を見て確認できるようにする。	・ じどう車には、「しごと」と「つくり」があることを理解している。 ・ 表現モデルを使って、じどう車の「しごと」と「つくり」を説明している。
4 表現モデルに当てはめながら、じどう車の「しごと」と「つくり」を説明する文章を書く。		

令和6年度 日本語指導研究推進事業 実践報告資料

[学校名： 加西市立北条小学校]

【具体的な研究テーマ】

クラス担任と日本語指導者との連携による “できる”を増やす 日本語指導
～覚える 解ける 実感する～

1	教科：単元名	算数 何倍でしょう	(啓林館 3年下)
2	実施日(時期)	11月8日	3 実施場所 日本語教室
4	児童・生徒の実態に応じたねらい (1) 児童の様子…学年・国籍、学習状況、日本語習得状況など A児 国籍：アフガニスタン 母語：ダリー語 日本生まれ DLA 話す(質的評価 平均2.9) 6/11に実施 友だちとのコミュニケーションは、日本語で行うことができ、日常生活上で困ることとは少ない。平仮名、片仮名等の読み書きはできる。 日本語による学習用語が身に付いていない上に、学習に向かう意欲が低いため、学習の定着には時間を要している。 B児 国籍：アフガニスタン 母語：ダリー語 来日2年3か月 DLA 読む(質的評価 平均2.4) 6/18に実施 友だちとのコミュニケーションを日本語で行えるようになり、日常生活で困ることは少なくなってきた。 知らない言葉も多いが、漢字や日本語の言葉を覚えることに意欲的に取り組むことができるため、本人のペースに合わせて学習を進めている。 (2) 日本語指導に関する目標 ・算数用語を確実に覚えることができる。 ・主語や述語に気を付けて文を読み、何が何倍になっているかを考えながら問題に答えることができる。 ・問題に合った答え方で、答えを書くことができる。 (3) 主な学習活動 ・算数用語の定着(既習の単元のもの) ・問題文の読み取りと状況の確認 ・操作活動(問題文に立ち返りながら) ・練習問題		
5	評価の観点(※指導案に記載してある場合は不要) ・関係図を描くことで、問題文を理解し立式することができる。 ・数量の倍関係に着目し、「何の何倍が何か」を説明することができる。		

6 指導内容の概要（※指導案別途添付）

- (1) 前単元の復習
 - ・円・球の「中心」「半径」「直径」の確認（絵や具体物を使用して）
 - ・拗音や促音に気を付けて、発音する。
- (2) 本児の内容を確認する。
 - ・教員が範読し、その後、一緒に読む。
- (3) 問題文を読む。
 - ・教員の範読後、文節ごとに線で区切り、音読する。
- (4) 問題文の内容を実物のペットボトル、バケツ、水槽に水を入れて確認する。
 - ・「ペットボトルに水は何リットル入っていますか？」
 - ・「バケツにはペットボトルの何杯分、入っていますか？」
 - ・「水槽にはバケツの何杯分、入っていますか？」
 - ・「たずねられていることはなんですか？」

*実際に具体物を操作することで、音としての単語からリアリティのある言語へつなげる。
- (4) 読み取った内容を関係図に表す。
 - ・2人で黒板に関係図を描く。
 - ・自分のノートに、関係図を描く。

*関係図にまとめることで、問題文の内容理解につなげる。
- (5) 立式する。
 - ・ノートに書いた関係図を確認しながら、立式をする。
- (6) 応用問題を解く。
 - ・水槽の水は、ペットボトル何本分かを考える。



7 指導内容・方法において工夫したところ

- ・問題文を読み取り易くするため、文節で区切る補助線を引いたこと。
- ・問題文の時系列に沿って、バケツ等の具体物を用いて確認したこと。
- ・「何（基準）の何倍」がわかるように繰り返し確認したこと。
- ・絵図カードを用いて考えたこと。絵図カードは、表にバケツ1杯分、裏にペットボトル4杯分が描かれたカードと、表に水槽1杯分、裏にバケツ2杯分が描かれたカードを準備した。また、量感をそろえる為、水槽1杯分のカードはバケツ1杯分のカードの長さの2倍にしたこと。
- ・黒板や自分のノートに関係図を描いた上で立式したこと。
- ・問題文の問いかけの文（最後の文）の書きぶりをヒントにして答えの文を考えたこと。

8 教材・教具

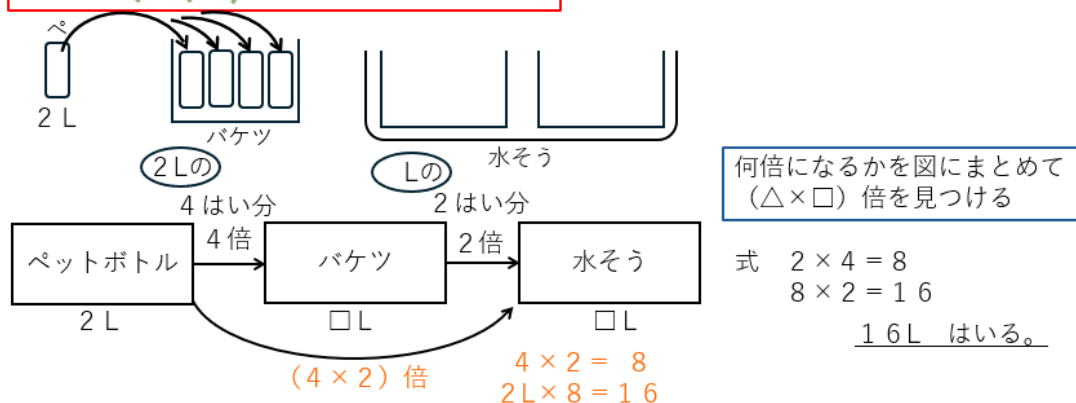
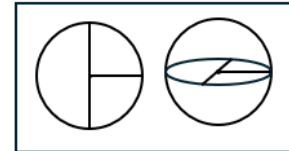
- ・ ペットボトル, バケツ, 水槽
- ・ 絵図カード 2種類

9 活動の様子（写真等）や児童・生徒の感想等

（板書計画）

何倍でしょう

ペットボトル、バケツ、水そうがあります。
 ペットボトルには水が2Lはいります。
 バケツにはペットボトルの4はい分、（はいります）
 水そうにはバケツの2はい分はいります。
 水そうには水が何Lはいりますか。



児童の感想

- A児 文に、線を入れてから読んだら文章問題の意味がわかった。
 B児 関係図にかいて考えたら式を立てることができた。

10 日本語能力測定方法と評価（DLAの活用）

6月上旬にDLAを実施した。会話による状況把握や、その説明はできていた。しかし、物の名前や、物語については、知らない事が多かった。普段は違和感なく会話することができ、不便を感じていることは少なく見えていたが、知らない言葉や表現がそのまま通り過ぎていっていることが考えられた。

それまでの学習においても、難しいと感じる日本語については、理解しているかをその都度確認していた。しかし、DLAの実施以降は、より細やかに日本語理解の確認を行っている。

今年度のまとめとしてのDLAは2月中頃から予定している。

11 実践をとおしての成果

学習の初めに、必ず前単元の復習を取り入れることで、算数用語の定着を図っている。算数用語の定着には、時間を要しているが、粘り強く取り組むことで、定着した算数用語が増えている。この取り組みは、今後も取り組んでいきたい。

本時の学習を行う中で、大切にすることは、「具体物を用いること」「文節に分けて、ゆっくりと問題文を読むこと」である。まず、「具体物を用いること」において、言葉だけでは伝わりにくい問題文でも、具体物を用いることで意味理解につなげることができた。A児は、実物を見ながら確認ができるため、意欲的に取り組むことができていた。B児は、物の名前を知っていなかったが、具体物を用いることで母語と日本語をつなげることができ、学習意欲をさらに高めることができた。

次に、「文節に分けて、ゆっくりと問題文を読む」において、文節に分けることで「～は」と「は～」の読み方の区別ができるように意識させた。また、「何の4倍か」「何の2倍か」を確認し、「何（基準）“の”〇倍」の表現に慣れるようにすることの2つに気を付けながら、状況を把握できるように絵図を用いながら支援した。その結果、A児・B児ともに、自分のノートに関係図を描いた後、立式することができ、「水槽には、水が〇L入ります。」と解答することができた。

このように、日本語指導において本人の実態に応じた指導を行ったことで、在籍学級の授業でも、自信をもって問題に取り組むことができるようになってきている。「文節に分けると読むことができる」という経験から、自分で文節に分けて問題文を読めるようになってきている。その結果、この単元における評価テストにおいて、8割程度正答することができ、さらに自信をつけていた。

12 今後の課題

日本語指導教室での取組を全職員に共有することがなかなかできなかった。次年度は、日本語指導教室での取組を積極的に発信し、日本語指導が必要な児童が在籍学級でも分かりやすい授業ができる体制づくりに努めていきたい。そのためにも、全職員で効果的な支援について校内研修で共有していきたい。

また、加西市において、年々外国にルーツをもつ児童生徒が増えてきている現状である。そのため、次年度は加西市内の先生方に対して授業公開を行い、日本語指導研究推進校としての取組を発信していきたい。

日本語教室 算数科学習指導案

令和6年 11 月 7 日（木）2校時

指導者 久野 達也

1 単元名 何倍でしょう （啓林館 3年下）

2 単元の目標 数量の倍関係について、図を使って何倍になるかを整理して考えたり、変量に着目して何倍になるかを考えたりすることを通して、乗除の適用場面や数量の関係について理解を深めるとともに、生活や学習に活用しようとする態度を養う。

3 評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
数量の倍関係を図に表し、乗法や除法を適切に用いてわからない数を求めることができる。 a 倍のb 倍が $(a \times b)$ 倍になることを理解している。	日常の事象における数量の倍関係に着目し、「何の何倍が何か」を正しく判断して図に表したり、図をもとにわからない数の求め方を考えたりしている。	数量の倍関係の学習に進んで関わり、振り返りを通して数量の倍関係を図に表すことや何倍になるかをまとめて考えることのよさに気づき、生活や学習にいかそうとしている。

4 単元について

対象児童の2名はアフガニスタン国籍で、両親ともにアフガニスタン人である。また、二人は従姉弟同士の関係で学級も同じで、共通の話題も多い。会話の中で日本語のニュアンスが難しい所は母国語で意思疎通を図っている。週に2～3時間、日本語教室での取り出し学習や、火～木曜日の加西市国際交流会館（ねひめカレッジ）での放課後学習の支援を受けている。

A 児	日本生まれ、日本育ちではあるが、日本の文化に触れてこなかった為、知らないことは多い。子ども園や学校で経験したことは覚えている。集中することに苦手があるため、教師の説明を聞き逃すことが多い。
B 児	来日して2年。来日当初こそ日本に馴染めなかったが、日本語でのコミュニケーションができるようになるにつれ、学習にも前向きに取り組むようになった。本格的に学習を開始したのが2年生からとは思えない程、当該学年の学習に参加することができている。アフガニスタンでは、学校施設を破壊されていた為、教育を受けることができなかったと聞いている。

本単元は、小学校学習指導要領算数科第3学年の「A 数と計算」（3）乗法（ウ）「乗法に関して成り立つ性質について理解すること。」及び（4）除法（ウ）「除法と乗法や減法との関係について理解すること。」のうち、数量の倍関係を指導するために設定されたものである。

第2学年では、乗法についての学習において「4の3倍」のような表現を扱い、整数を用いた倍の意味について学んでいる。この学習を踏まえ、第1時、第2時では整数の範囲で割合の3用法を扱い、「もともとなる量の何倍」という見方、考え方を身につけていく。第3時、第4時（本時）の問題解決の場面では、「順に考える」「何倍になるかをまとめて考える」という2つの方法を扱うことで、児童の数学的な見方・考え方をより豊かなものにする。

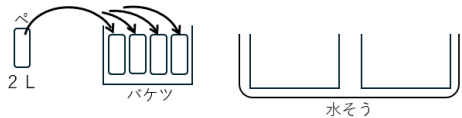
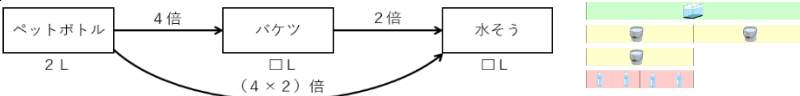
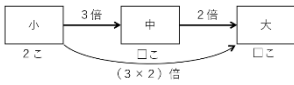
指導にあたっては、単語の境界が分かりやすいように斜線を引いたり、「バケツには、ペットボトルの4はい分」といった文章の“には”や“の”に着目して、基準がどちらになるのかを確かめたりしながら、1文ずつ教師と一緒に読み取っていく。そして、読み取った状況を簡単な絵にあらわしていくことで、問題の状況を把握させるようにしたい。また、水槽にはペットボトルの何杯分が入るのかを、絵図カードを用いながら考えさせるようにしたい。

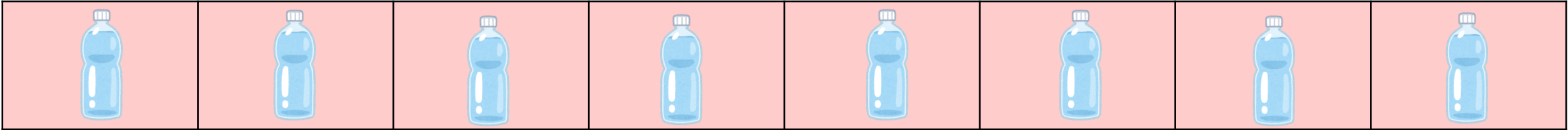
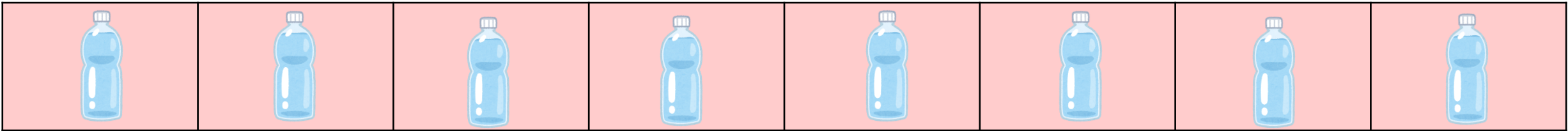
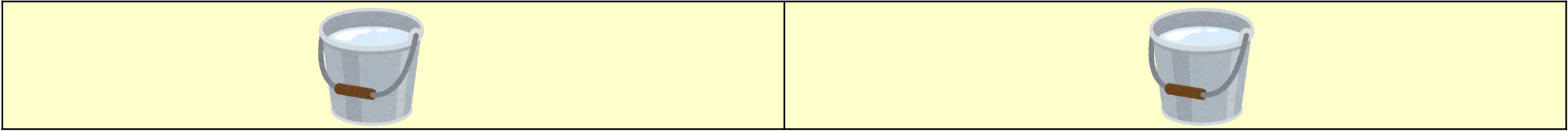
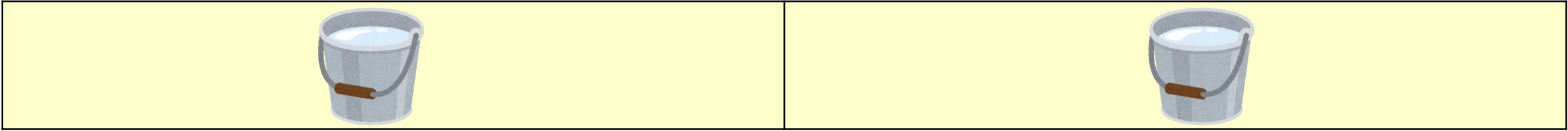
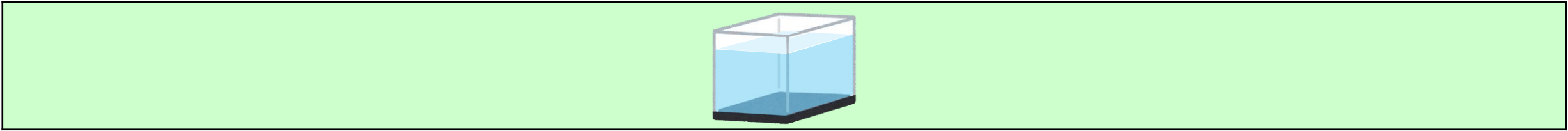
5 本時の指導（第4時／全4時）

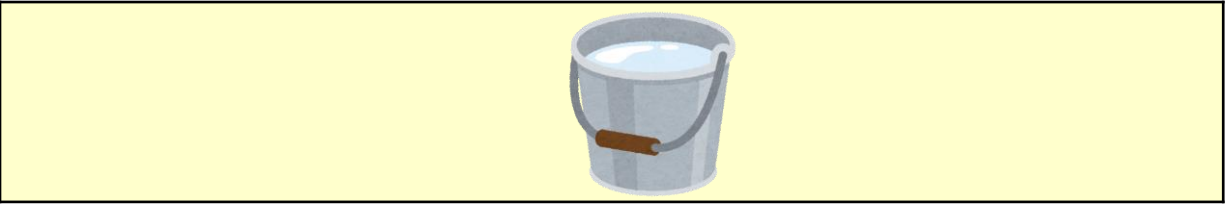
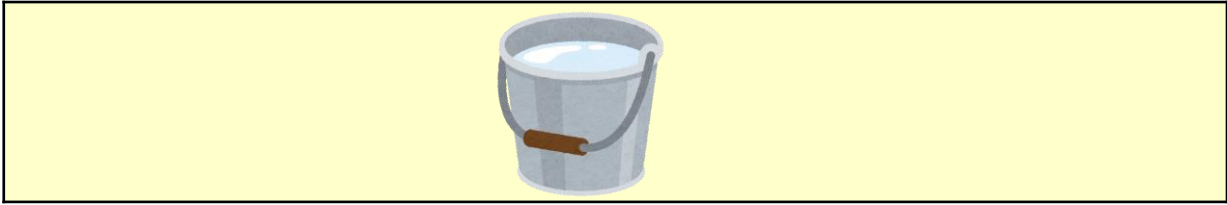
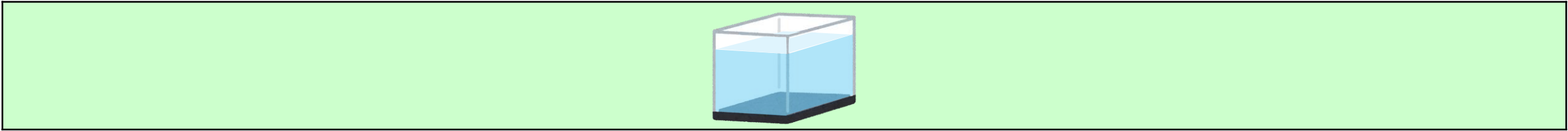
- (1) 目標
- 文章で与えられた状況をイメージすることができる。
 - $a \times b = d$ $d \times c = e$ の立式ができる。
 - a の $(b \times c)$ 倍を求めることができる。

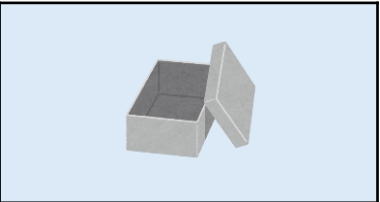
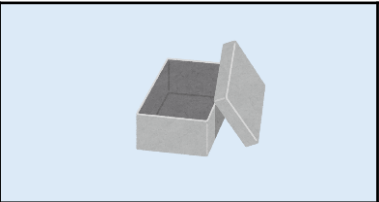
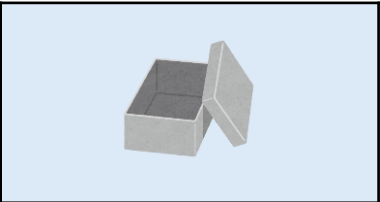
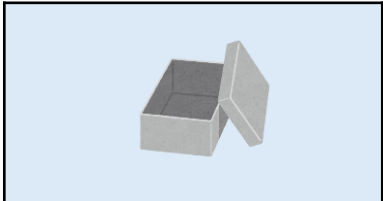
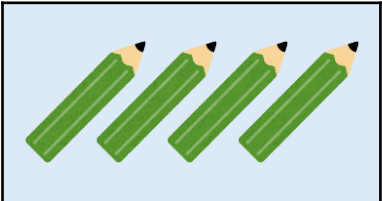
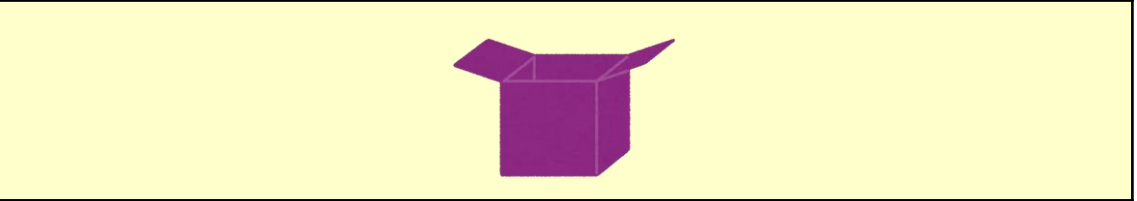
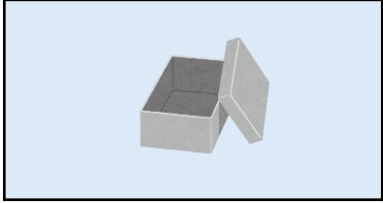
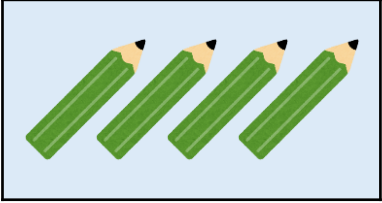
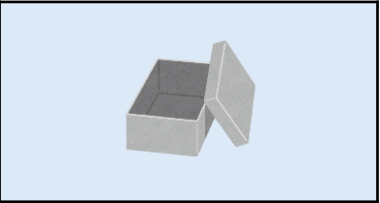
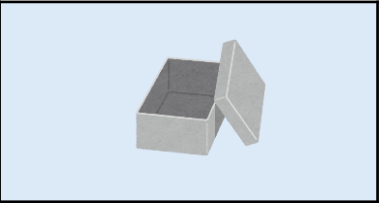
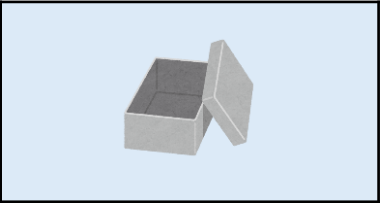
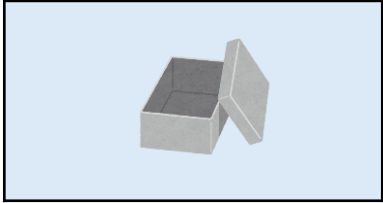
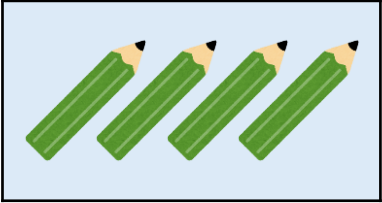
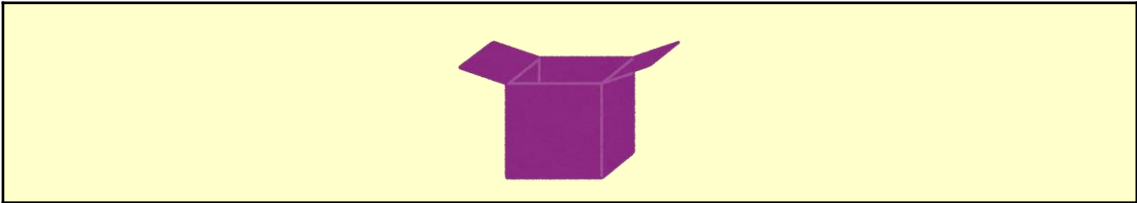
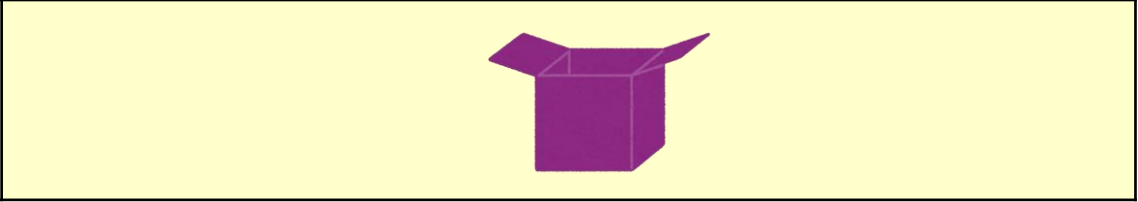
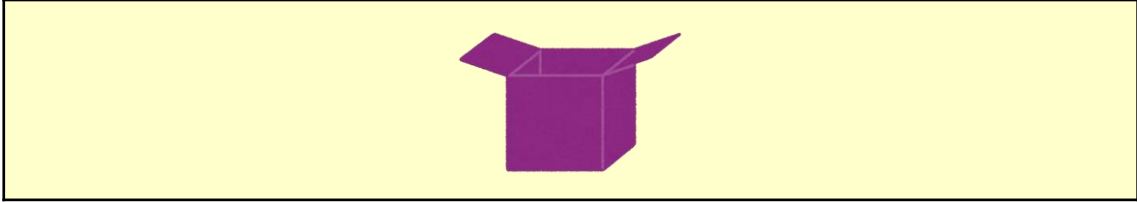
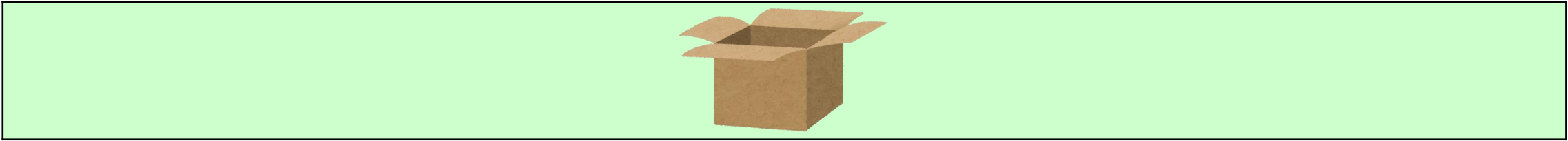
(2) 準備物 絵図カード 1組

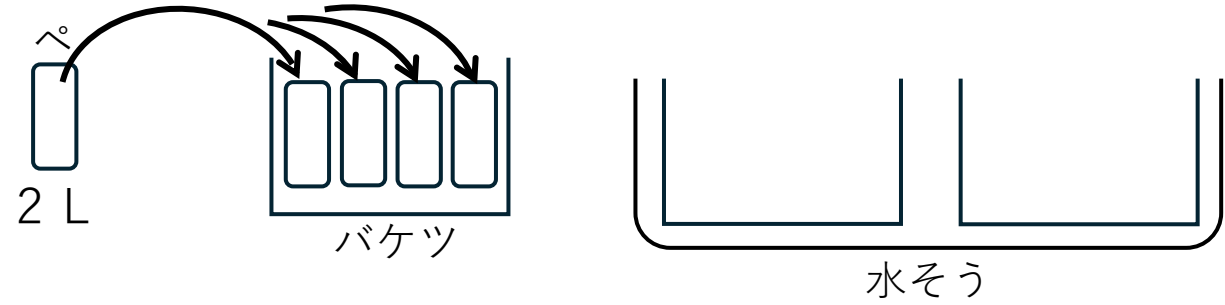
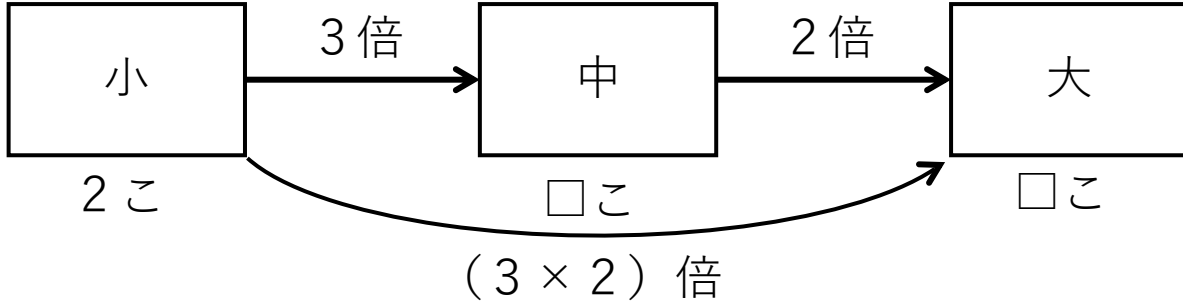
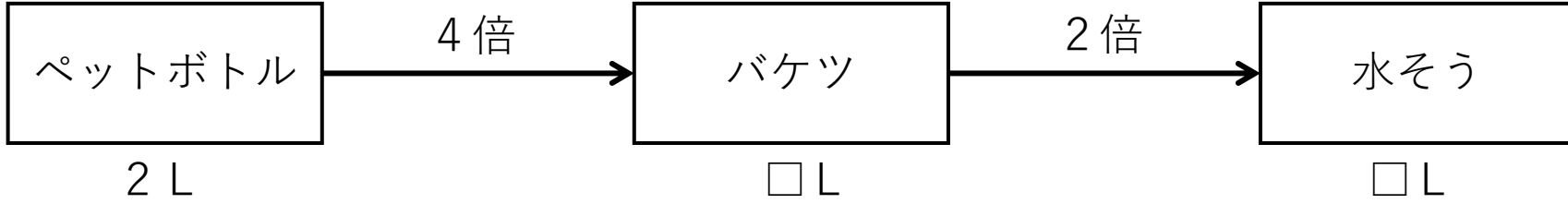
(3) 展開

学習活動	指導上の留意点（・）と評価規準（※）
1. 前単元の復習 - 円の中心、半径、直径の確認 - 球の中心、半径、直径の確認 2. 本時の課題を確認する	促音と拗音が重なっているなので、発音が難しい。手本を見せる時にはゆっくりと発音する。
（本時の課題） 何倍になるかを考えて計算しよう。	
- 本文を読み、状況の理解をする。 - 自分の考えをもつ - 図や絵で確認しながら自分の考えの確かめをする 3. 何倍になるかを考える。	- 一文ずつ状況を確認する。 （単語と単語の境界線、“には” “の” に着目させる） 「バケツ1杯＝ペットボトル4本」であることをおさえ、バケツの容量がペットボトルの4倍であることを確認する。 - 上記と同様に読み取り、「水そう1杯＝バケツ2杯」であることをおさえる。  - 読み取った文をもとに立式する。 $2 \times 4 = 8$ $8 \times 2 = 16$ - どのような考えで式を立てたか説明する時間を設ける。  - 絵図カードを用いて「水そう1杯＝ペットボトル（4×2）本」になることから、水槽がペットボトル何本分かを考える。 - 図で水槽がペットボトルの（4×2）倍になることを確認する。  - 立式する $2 \times (4 \times 2) = 16$
（まとめ） 何倍になるかを図にまとめることで（$\Delta \times \square$）倍を見つけることができる。	
4. 練習問題に取り組む 教科書 P19  	※A：図から（$\square \times \Delta$）倍を見つけ $a \times (b \times c)$ の立式ができる。 B：問題の時系列に合わせて立式することができる。 C：問題文の読み取りが難しく立式することができない。



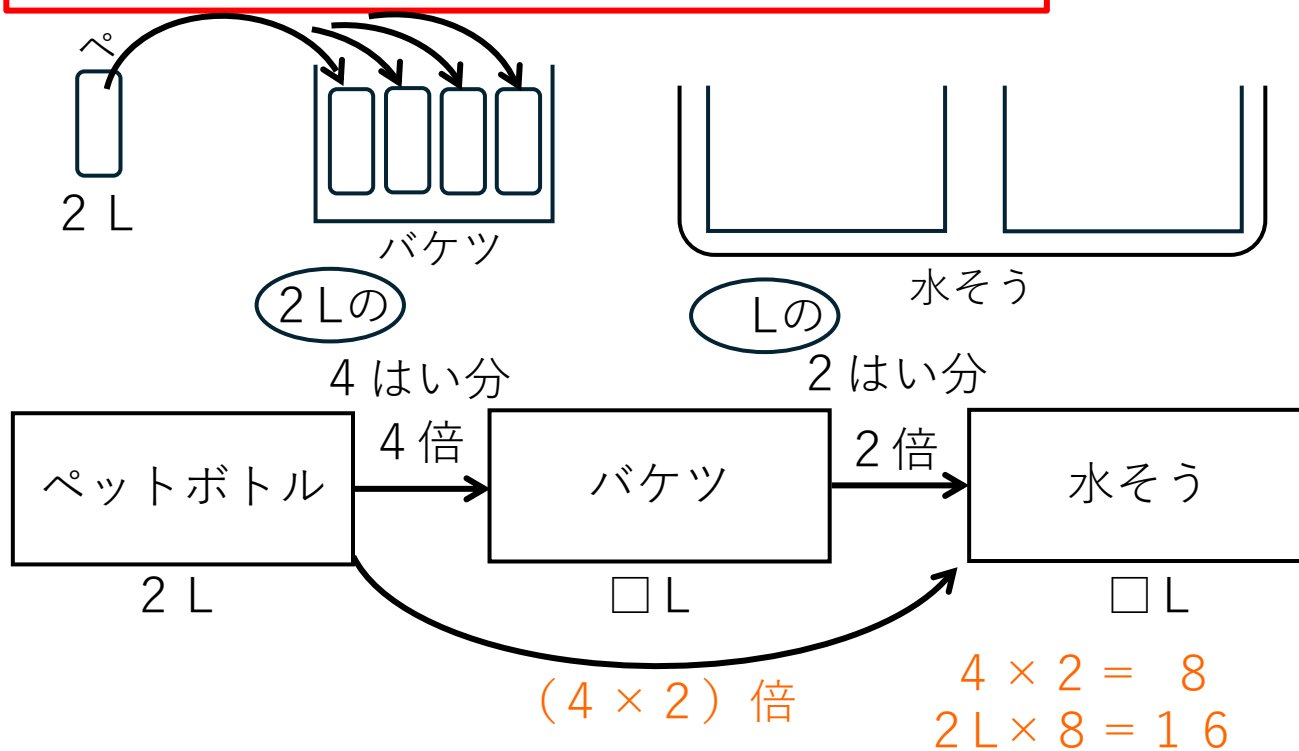
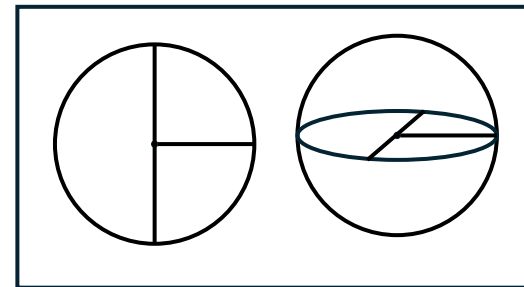






何倍でしょう

ペットボトル、バケツ、水そうがあります。
ペットボトルには水が2Lはいます。
バケツにはペットボトルの4はい分、(はいります)
水そうにはバケツの2はい分はいます。
水そうには水が何Lはいますか。



何倍になるかを図にまとめて
(△×□) 倍を見つける

式 $2 \times 4 = 8$
 $8 \times 2 = 16$

16L はいる。

令和 6 年度 日本語指導研究推進事業 実践報告資料

[学校名：姫路市立花田小学校]

【具体的な研究テーマ】

主体的に学び、ともに伸びようとする子どもの育成
～だれもが夢中になれる授業づくりにつながる日本語指導～

1 教科：単元名 算数科：あまりのあるわり算	
2 実施日（時期） 令和 6 年 11 月 19 日(火)	3 実施場所 3 年 3 組教室
4 児童・生徒の実態に応じたねらい (1) 児童の様子・・・学年・国籍、学習状況、日本語習得状況など A児...R5年3月に来日、3年・ベトナム国籍、ひらがな・カタカナは習得しているが、漢字は1年生相当。日常会話は、簡単な単語で話している。 ステージ2 B児...日本生まれ、3年・ベトナム国籍、日常会話は日本語でできるが、単語の意味が理解できていないことがある。わり算・かけ算の計算はできる。 ステージ3 C児...日本生まれ、3年・ベトナム国籍、日常会話は日本語でできるが、意味が分かっていない時もある。かけ算は6の段以降が習得できていない。 ステージ3 D児...5歳まで日本の保育所に通っていたが、一時ベトナムに帰国、R5年11月に再来日、4年・ベトナム国籍、日常会話は日本語でできる。学年相当の学力はあるが、分からない学習言語がある。 ステージ4 E児...日本生まれ、3年・ベトナム国籍、日常会話は日本語でできる。学年相当の学力はあるが、分からない学習言語がある。 ステージ4 (2) 日本語指導に関する目標 ・商と余りの意味が分かる。(商と余りの単位が違うことを理解する) ・「みんながすわる」「全部運ぶ」などの言葉から、余りの分を足して答えを出す意味がわかる。(ア)【強化語彙(新出語や難語)の意味がわかる】 ・余りの処理において、1きやく・1回・1日を足す理由を説明することができる。 「みんながすわるためには、もう1きやくいります。」 「あまりの分をいれる。」 「あまりを切り上げる」 (イ)【ある表現を通して、自分の意見や思考過程を言う(書く)ことができる】 「～には、あまりの分をいれて、もう1〇いります。」の表現を使って説明することができる。 (3) 主な学習活動 ①本時の課題をつかむ ②解決する(個人思考で解く。⇒全体で話し合い、まとめる。) ③練習(類似問題を解き、話型を使って説明する練習をする。) ④ためす(解きたい問題を選択⇒個人思考で解く。⇒交流する。) ⑤ふりかえる	
5 評価の観点(※指導案に記載してある場合は不要) *詳細は指導案に記載	

6 指導内容の概要（※指導案別途添付）

（1） 本時の課題をつかむ。

- ① 前時の問題と本時の問題を比較させることで、問題文に余りを問う言葉がないことに注目する。
- ② 図やスライドなどの画像から、余りの処理の仕方を考えるという課題をつかむ。

（2） 解決する

- ① 個人思考し、なぜその答えになるのか、図や言葉で説明しワークシートに記述する。説明が難しい児童はヒントカードを活用する。キーワードという言葉を使って、大切な学習言語に焦点をあてる。
- ② 考えたことを全体で話し合い、切り上げる問題の余りの処理の仕方を整理する。問題を説明する話型をつくり、まとめる。

（3） 練習する

類似問題を解き、話型をもとに説明する練習をする。

（4） ためす

- ① 生活場面の問題（2問）のうち自分で解きたい問題を選ぶ。次に説明の話型があるワークシートかないワークシートかを選択し、問題を解く。
- ② 解いたワークシートをもとに、隣の友だちに説明する。友だちが説明を理解できたらサインをもらう。他の友だちに説明して回る。たくさんサインがもらえるように、進んで繰り返し説明する。

（5） ふりかえる

本時の授業で分かったことや気付いたことを、ワークシートに書く。

7 指導内容・方法において工夫したところ

- ・スライドの画像を使って、視覚的に問題文を提示する。
- ・問題文は、言葉の意味で行をかえて提示する。
- ・座れない余りの3人を強調させるために、泣き顔にする。
- ・前時の問題文と本時の問題文を比べることで、「余りを問う言葉がない。」「みんながすわるには」ということがあることに注目させる。
- ・物の数え方クイズ（Google forms）に取り組みさせることで、椅子の数え方（脚）をおさえておく。
- ・事前につまずき（ $27 \div 4 = 6$ 余り 3 $6 + 3 = 9$ 答え 9 きゃく）を予想し、全体で問題点を確認する。
- ・キーワードを使って、大切な学習言語に注目させる。
- ・ヒントカードや話型を示すことで、表現支援する。
- ・数字をかえて同じ問題を解くことで、説明の仕方に慣れさせたり自信をつけさせたりする。
- ・学校生活の一場面を問題にすることで、状況をイメージしやすくする。
- ・練習問題を選択制にすることで、意欲を高める。
- ・友だちに問題の解き方を説明し、納得してもらえたらサインをもらうことで、（ゲーミフィケーション）進んでアウトプットすることができる。

8 教材・教具

- | | |
|--------------------|-----------------|
| ・スライド（問題文を画像にしたもの） | ・図 |
| ・問題を書いた掲示物（前時・本時） | ・ワークシート（課題解決用） |
| ・ワークシート問題①ヒント有 | ・ワークシート問題①ヒント無し |
| ・ワークシート問題②ヒント有 | ・ワークシート問題②ヒント無し |

9 活動の様子（写真等）や児童・生徒の感想等



児童の感想

- ・説明は難しかったけど、何回かしているうちにできるようになった。
- ・説明のヒントがあるものとなないものを選べるのは、いいなと思った。
- ・まだ日本語が上手に話せない友だちには、助けてあげないと思った。いつもより頑張っ
て言おうとしていたのすごいと思った。
- ・説明したり説明を聞いたりしたら、サインをもらえるのは楽しかった。
- ・あまりがたずねてなかったから難しかったけど、図を見たら1足したらいいことがわ
かった。

10 日本語能力測定方法と評価(DLAの活用)

日本語習得度確認シートやDLAでアセスメントを行い、児童の実態把握を行った。
それをもとに、対象児童がどの語彙や内容につまずくかを予想し、それを支援する授業
づくりをおこなった。

11 実践をとおしての成果

- ・授業で重要になる言葉を「キーワード」と提示することで、児童にその言葉を意識さ
せることができた。課題解決の手立てに有効だった。
- ・練習問題を4種類のワークシート（問題①ヒント有、問題①ヒント無し、問題②ヒ
ント有、問題②ヒント無し）から選べる、相手に分かりやすく解の説明ができれば相手
のサインがもらえる等の活動は、児童の意欲を高め、主体的に学習する動機になった。
- ・問題を動画で提示してから、図（半具体物）に置き換えたことや、計算の余りの図を
強調させるために泣き顔にしたことは、課題を把握させるのに有効だった。
- ・解の説明の話型を提示し、類似の問題で繰り返し言う機会を設定したことは、児童に
自信をつけさせた。
- ・ペア学習では、ステージ2の外国人児童（A児）が、隣の児童の優しい声かけのおか
げで頑張ろうとする姿がうかがえた。児童同士の学びの場を日頃から多く設定してい
くことが大切だと実感した。
- ・以前は教員に話しかけることが多かったステージ2の外国人児童（A児）が、少しづ
つ周りの友だちと会話をするようになった。話し合い活動にも参加する様子が見受け
られるようになった

12 今後の課題

- ・今回の授業では、支援を多く取り入れたことで外国人児童だけでなくすべての児童が
課題解決しやすかった。しかしその一方で、児童が思考する場面が少なくなっていまし
まった。授業に支援を取り入れつつ、深く思考させる場面を意図的に設定することも必
要であると感じた。
- ・引き続き外国につながる児童だけでなく、すべての児童にとって分かりやすい
授業をめざし、全教員で効果的な理解支援、表現支援、記憶支援の研修を継続して取
り組むことが課題である。次年度以降も支援のあり方について、校内研修年間計画に
位置付けていきたい。
- ・在籍学級担任、日本語支援員、日本語教員等複数で、日本語習得度確認シートやDL
Aを効果的に使い、児童の実態把握に努めることが今後の課題である。それを全職員
で共通理解するために、次年度以降も定期的に情報共有の場を校内で設定する等、支
援体制を整えていきたい。

- ・すべての児童が意欲的に自分の考えをお互いに伝え合ったり、認め合ったりする学習を推進していくことが課題である。そこで、理解したことを相手に伝える場、アウトプットする機会を意図的に取り入れた授業づくりに学校全体で取り組んでいきたい。

第3学年3組 算数科学習指導案

指導者 門口 彰太

1. 単 元 あまりのあるわり算

2. 趣 旨

- 本単元は、学習指導要領第3学年の内容A「数と計算」(4)に示された指導事項のうち、除数と商が共に1位数である、余りのある除法の計算を指導するために設定された単元である。わり算の余りの意味を理解し、余りのあるわり算の計算をできること、また場面に応じて適切に余りの処理できることをねらいとしている。これまでにわる数と商が1位数の場合の除法の意味と計算の仕方を学習してきているため、その発展として、余りのあるわり算の意味やその計算の仕方を学習する。さらに、考えを伝え合う活動を通して、場合によっては余りを切り上げたり切り捨てたりして適切に処理する必要があることを学び、日常生活の様々な場面で適切に使えるようにしていく。そして、これらの学習が第4学年の「1けたでわるわり算の筆算」へと発展していく。

- 本学級の児童は、26名の児童が在籍している。ベトナムにルーツを持つ児童が6名おり、学習や生活の中で言語面の支援が必要である。(現在抽出児童は6名記載。別紙記載。)

課題に対して意欲を持って取り組む児童が多い。友だちに進んで説明しようとしたり、分からないときは友だちや教員に自分から尋ねたりする児童もいる。簡単な計算問題に対する発表は意欲的である。しかし、自分の考え方を全体場で発表することに消極的な児童が多く、説明する児童が固定している現状がある。そのため、ペアやグループなど少人数で説明する機会を取り入れて進めている。プレテストの結果は以下の通りである。(実施人数24人)

問題	正答率
1 計算問題(8問) ① $18 \div 2$ ② $15 \div 5$ ③ $24 \div 6$ ④ $56 \div 8$ ⑤ $42 \div 7$ ⑥ $3 \div 3$ ⑦ $5 \div 1$ ⑧ $0 \div 6$	① 96% ②100% ③96% ④92% ⑤ 96% ⑥100% ⑦100% ⑧100%
2 文章問題 りんごが12個あります。 ① 1人に4こずつ分けていくと何人に分けられますか。 ② 4人に同じ数ずつ分けると1人何個になりますか。	① 87% ② 83%
3 2の①の文章問題を図に書いて説明しましょう。	図のみ正解 63% 図・説明正解 42%

かけ算やあまりのないわり算の計算の仕方については、比較的理解できている。図に書いて説明する問題では、正しく図と式で説明できた児童が10人おり、間違った図をかいている児童や図は正しくかけているが説明ができていない児童がいた。このことから、除法として処理できていても意味理解や場面の把握が正しく理解できていない児童が多いことがわかった。また、図と式を対応させて説明する力が十分に身につけていないといえる。

- 指導にあたっては、まず、既習のわり切れる除法計算をもとにわり切れずに余りの出る場合があることを知らせ、その答えの求め方を考えさせていく。その際、除法の導入時と同様に、ブロックなどの半具体物の操作や図で表現させることで、わり算の余りの意味や商、除数、被除数の関係を

より理解できるようにする。さらに、わり算をした後、余りがわる数より小さくなっているかどうか必ず見直しさせたり、具体的な操作を振り返らせ、答えの確かめの式を児童がつくり出せるよう支援したりすることで、理解を深めさせる。ペアでの話し合いや図を使って発表させることを通して、式と図を対応させて説明する力を伸ばしていく。余りを適切に処理して答えを出す問題では、図の余りに泣いている印をつけることで余りの処理に注目させる。全体交流の中で、商と余りの単位が違うことから、余りを足すのではなく、1つ足さなければならないことを理解させる。「みんながすわる」の言葉を押さえ、問われていることを正しく理解できるようにし、余りの処理の仕方を説明させていく。その中で話型を交流の中で作っていくことで、自信をもって説明できるようにする。また、問題文から実際の場面をイメージできるように、学校生活で経験する場面を練習問題にすることで、その状況に応じて余りを切り上げなければいけないことを理解させていく。さらに、自分で練習問題を選んだり、友だちのサインをもらったりする活動から夢中になって相手に説明する意欲を引き出していきたい。単元を通して図と式を対応させて説明する力を養い、生活に結び付いた算数の力を育成していきたい。

3. 小中一貫教育の視点

- 本単元の学習では、第4学年の「1けたでわるわり算の筆算」、第5学年の「小数の乗除」、第6学年の「分数の乗除」から、中学校の第1学年の「文字式の乗除法の表し方」へとつながっている。

4. 単元目標

- 余りの意味や余りのあるわり算の計算の仕方を理解し、余りのあるわり算の答えを求めたり、確かめたりすることができる。(知識・技能)
- わり算の意味にもとづいて余りの大きさを判断したり、目的に合わせて余りの処理の仕方を考えたりしている。(思考・判断・表現)
- 余りのあるわり算に進んで関わり、ふり返りを通して余りのあるわり算の答えの求め方や目的に合わせて余りを処理することのよさに気づき、生活や学習に活かそうとしている。(学びに向かう力)

5. 指導計画（全8時間）

時	児童の学習内容・活動	評価	大切な言葉（新出語・既出語・難語・「表現」）
1	あまりのあるわり算の表し方	(思)既習のわり算の仕方をもとに、余りのあるわり算の答えの求め方を考えている。 (技)余りのあるわり算の場面を式に表し、答えを求めることができる。	・あまり ・わり切れる ・わり切れない
2	わる数と余りの大きさの関係	(思)わり算の意味にもとづいて、余りの大きさを考えたり説明したりしている。	・あまりは、わる数より小さい ・あまり<わる数
3	余りのあるわり算の仕方	(技)余りのあるわり算の立式や計算ができる。	・一人分の数とあまり
4	答えの確かめ方	(態)答えの確かめるよさに気づいて	

		いる。	
5	練習	学習内容を確実に身につける	
6	余りを切り上げる問題 本時	(思)余りを切り上げて処理すればよいわけを考えたり説明したりしている。	みんながすわるためには、あまりをいれる。
7	余りを切り捨てる問題	(思)余りを切り捨てて処理すればよいわけを考えたり説明したりしている。 (態)目的にあわせて余りを処理することのよさに気づき、生活や学習にいかそうとしている。	車を作るためには、あまりをいれない。
8	たしかめ		

6. 本時の学習

(1) 目標

問題場面に合わせて余りの処理の仕方を考え、余りを切り上げて処理することができる。

(2) 日本語の目標

- ・商と余りの意味が分かる。(商と余りの単位が違うことを理解する)
- ・「みんながすわる」「全部運ぶ」などの言葉から、余りの分を足して答えを出す意味がわかる。

(ア)【強化語彙(新出語や難語)の意味がわかる】

- ・余りの処理において、1 きゃく・1 回・1 日を足す理由を説明することができる。

「みんながすわるためには、もう1 きゃくいります。」

「あまりの分をいれる。」

「あまりを切り上げる」

(イ)【ある表現を通して、自分の意見や思考過程を言う(書く)ことができる】

「～するには、あまりの分をいれて、もう1 □いります。」の表現を使って説明することができる。

(3) ターゲットセンテンス

「全員がすわるためにはどうしたらいい」

「この3は、何を表していますか？」

7. 学習課程

学 習 活 動	・指導上の留意点 ◆評価 理解支援(理) 表現支援(表) 記憶支援(記)	備 考
1. 本時の課題をつかむ 27 人います。長いす 1 きゃくに 4 人ずつすわっていきま す。みんながすわる には、長いすが何き ゃくいりますか。 ・ $27 \div 4 = 6$ あまり 3 みんながすわるには、長いすが何きゃくいるか考えよう。	・前時の問題・図と本時の問題を順に掲示し、どこが違うのかを問い、前時までの問題との違い(問題文に余りを問う言葉がないこと)に気付かせる。(理) ・あまりと書いた掲示物を黒板に掲示したり、図の中に泣いている印をつけたりすることで、あまりの処理に注目させる。(理) ・余りの処理の仕方を投げかけ、意見を出させる中で、めあてにつなげる。	スライド 掲示物 掲示物
2. 解決する ○個人思考 ・ $27 \div 4 = 6$ あまり 3 $6 + 1 = 7$ 7 きゃく ○全体での話し合い ・ $27 \div 4 = 6$ あまり 3 $6 + 1 = 7$ 7 <u>きゃく</u> 13 人います。長いす 1 きゃくに 4 人ずつ すわっていきます。みんながすわるには、 長いすが何きゃくいりますか。 $13 \div 4 = 3$ 余り 1 $3 + 1 = 4$ 4 きゃく 4. ためす ・ 個人思考	・自分の考えから図や言葉で説明をワークシートに記述する。 ・説明が難しい児童には、ヒントカード「みんながすわる」には、あまりの分を入れて、もう 1 きゃくいる。」を渡すことで問題を捉えさせる。(表) ・図とキーワードみんながすわるを書かせることで説明の参考にできるように促す。 ・あまりの 3 の単位が何であるかを問い、答えとあまりの単位の違いがあることを押さえておく。(理) ・図を使って説明させることで、あまりの分を足すことを具体的に捉えさせる。(理) ・数人に説明させた後、切り上げる問題の余りの処理の仕方を整理する。その際、問題を説明するための話型を作る。(理) (まとめ・話型) みんながすわるには、あまりの分をいれて、もう 1 きゃくいる。だから、$27 \div 4 = 6$ あまり 3 になり、$6 + 1 = 7$ になります。 ・練習問題を掲示し、話型に合わせて説明させることで、話型を使う練習をする。(表) ・生活場面の問題(2 問)を自分で選んで、問題を解き、説明を考える。 ・話型ありとなしのワークシートを用意することで、自分に合ったものを選んで問題を考える。(表)	・ワークシート ・ヒントカード ・掲示物

・ 交流 ペア→全体 5. ふりかえる	「ドッジボールが 11 こあります。1 回に 2 こずつ運ぶと何回で全部運べますか。」 「冬休みの宿題が 18 ページあります。1 日に 4 ページずつすると何日で全部できますか。」 ・ 友だちに説明できたら、サインをもらうことで、進んで繰り返し説明できるようにする。(記) ・ 説明が難しい児童には、教員と対話することで図と説明・話型をつなげて、説明できるようにする。(表) ◆ 問題によって余りの切り上げることが必要になることを理解し、余りの 処理の仕方を説明することができる。(思考・判断・表現) ・ 気づいたことやわかったことをワークシートに振り返り、車を作る問題を提示し、次時の活動への意欲をもたせる。	
---------------------------------------	--	--

めあて

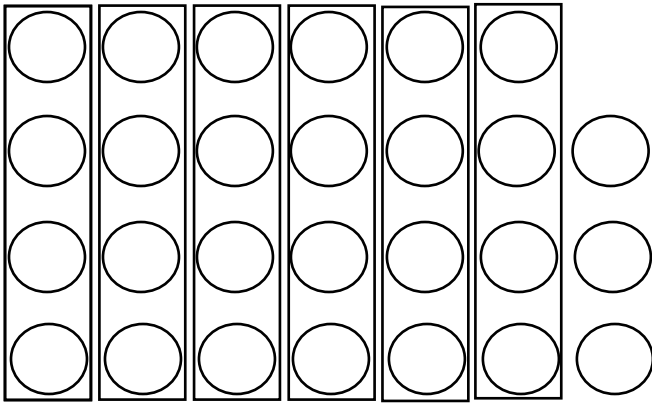
27 人います。

^{なが}長いす 1 きゃくに 4 人ずつすわっていきます。

みんながすわるには、^{なが}長いすが^{なん}何きゃくいりますか。

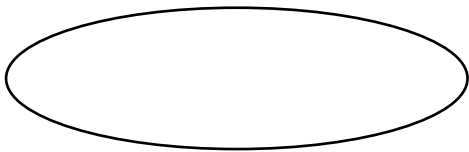
(式)

(図・^{せつめい}説明)



答え _____

キーワード



まとめ

ふりかえり

名前()

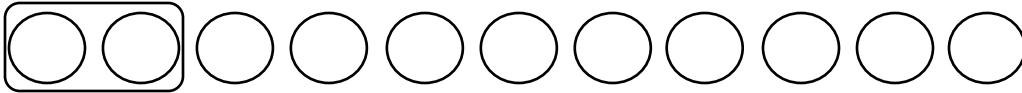
ドッジボールが 1 1 こあります。

1 回に 2 こずつ^{はこ}運びます。

全部運ぶ^{ぜんぶはこ}には、何回いりますか。

(式)

(図・説明^{せつめい})



答え _____

キーワードを使って友だちに説明^{せつめい}してみよう！

じょうず^{せつめい}に説明できたら友だちにサインを書いてもらおう！

名前()

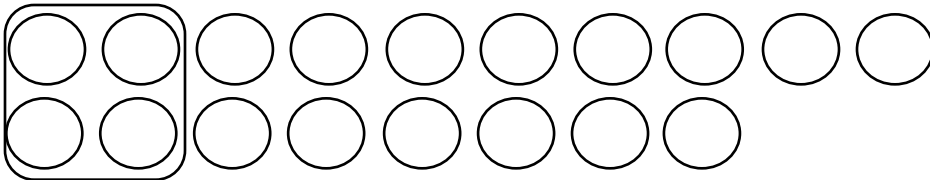
^{ふゆやす}冬休みの^{しゅくだい}宿題が18ページあります。

1日に4ページずつします。

^{ぜんぶお}全部終わるには、何日いらいますか。

(式)

(^{せつめい}図・説明)



答え_____

キーワードを使って友だちに^{せつめい}説明してみよう！

^{じょうず}上手に^{せつめい}説明できたら友だちにサインを書いてもらおう！

名前()

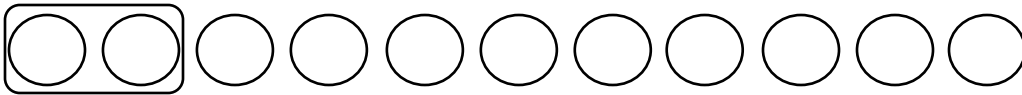
ドッジボールが 11 個あります。

1 回に 2 個ずつ運びます。

全部運ぶには、何回いらいますか。

(式)

(図・説明)



には、あまりの分をいれて、もう 1 回いる。

だから、式は $\quad \div \quad = \quad$ あまり $\quad$ になり

$\quad + \quad = \quad$ になります。

答え $\underline{\hspace{2cm}}$

キーワードを使って友だちに説明してみよう！

上手に説明できたら友だちにサインを書いてもらおう！

名前()

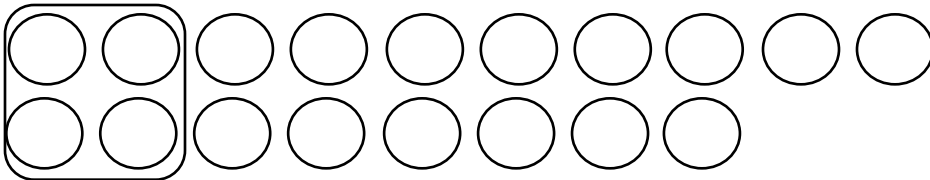
^{ふゆやす}冬休みの^{しゅくだい}宿題が18ページあります。

1日に4ページずつします。

^{ぜんぶ お}全部終わるには、^{なんにち}何日いらいますか。

^{しき}
(式)

(^{せつめい}図・説明)



には、あまりの分をいれて、もう1日いる。

だから、式は ÷ = あまり になり

 + = になります。

答え _____

キーワードを使って友だちに^{せつめい}説明してみよう！

^{じょうず}上手に^{せつめい}説明できたら友だちにサインを書いてもらおう！